

## 電子テキスト化された三浦梅園の主著『玄語』

○赤星哲也

—江戸時代のハイパーテキストを読み解く—

○北林達也

A try of the interpretation of  
the Baien Miura's main text "GENGO"  
on computer○AKAHOSHI, Tetsuya  
○KITABAYASHI, Tatsuya

We edited the "GENGO" text on computer, and tried the interpretation of it. The "GENGO" text was written by Baien Miura who was the thinker at the middle of the Edo period. As a result, we discovered that it was the group of propositions for the logical model on the earth's ecological system, and that it was described with the clear construction. These facts suggest that the "GENGO" text was hypertext on paper media. We report the details of our try, and give an outline roughly about the project that we will edit the "GENGO" text on a hypertext system.

## 1. はじめに

人文科学、特に、テキストの解釈を主たる研究対象とする哲学や思想、文学などの研究領域においては、今やコンピュータは欠かすことのできない存在となりつつある。特に、テキストをコンピュータ上で処理できる形にした、いわゆる「電子テキスト」を用いた解釈作業の試みは、主として「検索」機能の利用によって従来の人的、あるいは時間的な制約を大幅に軽減するとともに、「紙」メディアの上だけでは困難であった多様な読書様式を可能にした<sup>1)</sup>。

我々はこの電子メディア上の多様な読書様式の可能性を示す研究の一例として、江戸時代中期に豊後の国（現在の大分県）で活躍した自然学思想家「三浦梅園」の主著である『玄語』というテキストを取り上げ、これを電子テキスト化することで新たな解釈作業を試みている<sup>2)</sup>。

一方、テキストの電子テキスト化はインターネットなどのネットワークを利用することにより、電子テキストそのものを研究のためのパブリックドメインとして機能させる可能性をも開いている。しかし、現在のコンピュータ技術、とりわけ文字（文字コード）の扱いについては未解決の問題が多く、コンピュータを用いたテキスト研究の障害となっている。

## 2. 電子テキスト化による『玄語』解釈の試み

## 2.1 三浦梅園と『玄語』

三浦梅園(享保八～寛政元年、1723～89年)は近世日本を代表する思想家であり、その主著には『玄語』『贅語』『敢語』の、いわゆる「梅園三語」がある。内藤湖南はこれを評して、「三百年間、其の一毫人に資る所なくして、段々たる発明創見を説を為せる者、富永仲基の『出定後語』、三浦梅園の『三語』、山片蟠桃の『夢の代』、三書是のみ」（『近世文学詩論』1897）と語り、その思想としての独創性を高く評価している。なかでも『玄語』は梅園の思想体系「条理学」を総括したテキストとして知られているが、その内容があまりに難解であったため、今なお解釈に定説というものが無い。これは『玄語』が梅園自身の造語（条

理語という) によってのみ記されており、古典旧籍からの引用がまったく見られないこと、条理語の定義もまた条理語を用いて行われていること、『玄語』には曼陀羅に似た円環状の図(玄語図)が160余点もあり、この玄語図との関連によって条理語相互の関係が定義されていること、などが原因であったと思われる。

このことはまた、『玄語』を印刷物として忠実に復元することの障害ともなっており、梅園没後120余年を経て初めて印刷物として出版された『梅園全集上下二巻』<sup>⑩</sup>(明治45年)をはじめとして、今日まで印刷出版されたものはみな何らかの意味で『玄語』テキストのサブセット版といわざるを得ない。

以上のような事実から、我々は、『玄語』のテキストとしての難解さは「紙」メディアとのなじみにくさに起因しており、電子メディア上のハイパーテキスト・システムにおいてこそ『玄語』テキストの忠実な復元と、これを利用したテキスト解釈のための研究環境を実現できると考えるに至った。

## 2.2 構造化されたテキストとしての『玄語』の発見

『玄語』の電子テキスト化への取り組みは、まず浜田晃(現・東邦高校国語科教諭)が1982年から1987年にかけて『梅園全集上下二巻』に準拠して行った。以下、浜田によって電子テキスト化された『玄語』を浜田版と略すことにする。

報告者の一人、北林はこの浜田版を利用して1992年から『玄語』の訓読作業に取りかかり、その解釈作業にパーソナルコンピュータ上のテキスト・ユーティリティー特に、grepとエディターを用いることとした<sup>⑪</sup>。その結果、電子テキスト化された『玄語』テキストに次のような明確な「構造」があることを発見するに至った。

- (1) 条理語(定義文も含む)が対称性をもって配置されていること(部分の対称性)
- (2) 『玄語』の記述全体が対称性をもった階層構造をなしていること(全体の対称性)

以下、北林がこの"部分"と"全体"双方に共通する対称構造を発見した過程を概略する。『玄語』はその記述上の特徴の一つとして、黒点と白点の2つの読点を使用している。北林はこの黒白の読点に注目し、浜田版を元にこれを黒点、白点で区切り、それぞれを(エディタでいうところの)論理行1行に対応させてみた。この結果、『玄語』内の用語(条理語)、及びこれを含む文が対称性をもって配置されていることが明らかとなり、さらにこの電子化されたテキスト全体に対してgrepを用いた検索を試みたところ、あるまとまりを持ったパラグラフ群の間にも対称性があり、これが全体として階層構造の形に配置されていることが判明した。

## 2.3 『玄語』テキストの"構造"と思考方法に対する数理的・工学的接近

末木剛博<sup>⑫</sup>によれば、『玄語』テキストを通して展開される梅園の自然学思想「条理学」の中心的な思考方法である「反観合一」は集合・論理的操作に還元できるという。報告者の一人、赤星は『玄語』テキストに見られる表現上の対称性構造はこの「反観合一」の集合・論理的操作の結果であり、これを数理的・工学的に解明することでコンピュータによる思考支援(Enhacing Thought)研究にも応用できるのではないかと考えている。

ここで、反観合一とは、「自然の事物・事象には、ある比較基準に照らし合わせてみたと

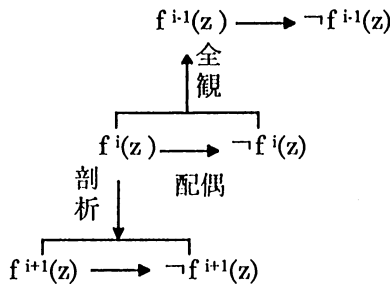
き、それと必ず対をなす事物・事象が存在し、さらにまたこの両者を包含する事物・事象が存在する」とする思考方法のことである。これを集合・論理的操作に置き換えれば、ある集合  $p$  に対して、これの否定(補集合)である  $\neg p$  が存在し、さらにこの2つに対して排中律を適用することでこれらを包含する全集合  $U$  が存在する、ということになる。

$$U = p \cup \neg p$$

ここで、一般に、任意の集合を  $z$  とおき、この集合  $z$  に対して、ある比較基準を適用することで部分集合を作る関数を次のように定める。

$$f(z) \equiv \{x \mid (x \in z) \cdot f(x)\}$$

さらに、この部分集合を求める操作を  $i$  回繰り返して行う関数を  $f^i(z)$  と定めることにすると、次のような対称性を持った構造が生じることがわかる。



【玄語】テキストはこの集合・論理的操作—配偶・剖析・全観—の繰り返しからなる命題群の集まりである、というのが末木の論考である。この集合的・論理的操作の関数  $f^i(z)$  には「天・地・陰・易」(ただし、「陰」には「こざとへん」のない字が原文では用いられている)の各条理語が適用されることになるが、各条理語の意味はその文脈によって異なるため、関数  $f^i(z)$  の数理的解明、及び、これを工学的に具現化することはこれからの課題として残されている。

### 3. 電子テキストとしての【玄語】の可能性と問題点

#### 3.1 ハイパーテキストとしての【玄語】

【玄語】が構造化されたテキストであること、さらに玄語図を通して条理語相互の関係が表現されていることなどから、我々は【玄語】をハイパーテキストであると考え、適当なハイパーテキスト・システム上にこれを実現することを試みている。その証左としては、たとえば、【玄語】の「例旨」(序文に相当するもの)に「どこから読み始めてもよいし、どこで読み終えてもよい。斜めに読んでもよいし、上から下に、下から上に読んでもよい」と梅園自らが記述していることをあげることができる。

このハイパーテキスト版【玄語】を用いることで、【玄語】の思想体系、及び、これを構想した梅園自身の思考方法論(“思考のエンジン”)についてのより詳細な解明が進むことはもちろん、【玄語】テキストの解釈作業に取り組む研究者らにとっての共通のデータベース(パブリックドメイン)として機能することが期待される。

以上のような理由により、我々は現在、他の研究者たちと共同して【玄語】の、

- (1)WWWを使った電子テキスト版【玄語】の読書環境の提供(主として「検索」機能)
- (2)BTRON-OS上でのハイパーテキスト化

(3)3次元ビューワによる『玄語』テキストの視覚化(梅園思想体系の視覚化)などを試みている。

### 3.2 漢字の問題

しかし、電子テキストによるパブリックドメイン化にあたっては問題も少なくない。最大の問題点は「漢字」の扱いである。これは『玄語』テキストに限らず、漢字で記されたすべての古書典籍、とりわけ中国哲学に関するテキストの電子テキスト化に共通する問題であるが、幸いにも『玄語』の場合はJIS補助漢字(約6千字)を用いることで主要な用字のほとんどをカバーすることが可能である。現時点でこのJIS補助漢字をサポートしたOSとしては唯一BTRON-OSがあるが、他のOSと比べて人文科学者が手軽に利用できるテキスト・ユーティリティなどのツールが少ないなど課題も多い。もっともBTRON-OSでは「実身・仮身機能」を利用することでハイパーテキスト・ドキュメントを容易に構築できるため、『玄語』の電子テキスト化を進める上で、極めて有力なプラットフォームであることは確かである。

### 4. 終わりに

梅園の名著『玄語』のテキスト解釈をめぐって、人文科学分野におけるコンピュータの可能性—電子テキストの可能性—について考察してみた。今後は、『玄語』のハイパーテキスト化作業を通じて、『玄語』テキストを通して梅園が構想した自然学思想体系の究明を進める一方、ハイパーテキスト・システムを中心とした電子テキスト技術を用いることによる思考の外在化と操作性の可能性についても研究を進めていきたい。特に、梅園の「反観合一」の思考方法を数理的、工学的に解明しコンピュータ上で実現することは、コンピュータを用いた思考支援環境をデザインする上でも極めて有益な情報をもたらすものと我々は確信している。

### 参考文献

- [1]J.D.Bolter:ライティング・スペース,産業図書,1994
- [2]赤星哲也,北林達也:電子文書化された三浦梅園の名著『玄語』,第29回人文科学とコンピュータ研究会(情報処理学会),1996
- [3]梅園会:梅園全集(復刻版),名著刊行会,1984
- [4]黒崎政男:哲学者クロサキのMS-DOSは思考の道具だ,アスキー,1993
- [5]末木剛博:『玄語』の論理(一),梅園学会報・第7号,1982

---

赤星哲也(AKAHOSHI,Tetsuya) e-mail:akahoshi@mc.nbu.ac.jp

日本文理大学NBUメディアセンター 大分県大分市一木1727 (tel.0975-92-1600)

URL <http://www.mc.nbu.ac.jp/~akahoshi>

北林達也(KITABASHI,Tatsuya) e-mail:baika@fat.coara.or.jp

三浦梅園研究所 大分県大分市今津留3-4-21-403 (tel.0975-56-6107)